

氏 名 椋棒 哲也

学 位 の 種 類 博士（文学）

報 告 番 号 甲第350号

学位授与年月日 2013年9月30日

学位授与の要件 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）  
第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 大正・昭和前期における農民文学の研究

審 査 委 員 （主査）藤井 淑禎

林 淑美

高橋 博史（白百合女子大学大学院国語国文学専攻教授）

## I 論文内容の要旨

論文名…大正・昭和前期における農民文学の研究

### (1) 論文構成

序章 農民文学研究史

### 第一部 農民文学前史（～昭二）

第一章 加藤武雄『郷愁』について

第二章 郷土芸術・田園・地方色

### 第二部 農民文学の出発（大一一～昭九）

第三章 和田傳の出発期を読む

——大正末から昭和初めの農民文学論を視座として——

第四章 黒島伝治「銅貨二銭」と「豚群」のあいだ

### 第三部 戦時下の農民文学（昭九～一五）

第五章 国策文学論序説——和田傳「沃土」「大日向村」とその周辺——

第六章 面白い農民文学——山田多賀市「耕土」について——

### 第四部 戦後の農民文学（昭二一～三六）

第七章 電源文学論——あるいは戦後の伊藤永之介をめぐる考察——

第八章 戦後和田傳文学が描いた農民像——「鰯雲」「風の道」を中心に——

終章 農民文学とは何だったか（昭三六～）

参考文献

## （２）論文の内容要旨

序章では先行する農民文学研究を祖上に載せて、特定の文学陣営への偏向、扱う範囲が短いことなど、問題点を指摘したうえで、自説をスタートさせている。

第一部第一章では、大正 11 年以降の農民文学運動において排除されがちなそれ以前の思潮を農民文学前史として取りあげ、郷土芸術家・加藤武雄の作家的出発について考察し、その作品が社会批評につながる視点を含むと結論づけている。第二章では同時代の郷土芸術論や田園文学論、地方色に関する言説などを検討し、それらが関係していた様子を明らかにしている。

第二部第三章では、階級的立場からの農民文学を重視するナップ（全日本無産者芸術連盟）派と第三次『農民』派との角逐を視野におさめつつ、流通過程における搾取に取材する同時代の和田傳を、雑誌『農民』の特徴を体現した文学者と位置づけている。また第四章では農民文芸会とプロレタリア文学陣営の両方に所属した黒島伝治の作品研究を試みている。黒島の初期においては青野季吉の〈目的意識論〉の影響以上に、都会と田舎の対比や、感覚描写に注視すべきであるとする。

第三部第五章では、昭和 14 年の農民文学懇話会後、国策の影響が強まった時代の代表として和田傳を取り上げ、特定農村の事例を農村全般の象徴として描く手法が国策の要求に応えるものとなったと指摘する。また第六章ではプロレタリア文学陣営に目を転じて、山田多賀市『耕土』を考察した。挿話作りに巧みで細部の表現がうまく、土地／耕地／耕土という要素が作中に効果的に表れることも手伝い、〈面白い農民文学〉を実現しているとした。

第四部第七章では、太平洋戦争後、農民と農村のあり方が変わり、農民文学は困難な状況に追いこまれたが、その時期の一例として伊藤永之介「電源工事場」を取り上げ、復興事業である電源開発において開拓農民たちが搾取される様子を描き、戦後日本の歪みを描いたとする。第八章では、当時の思潮に寄り沿いつつも、『風の道』によって新しい農民像を〈自己表現する女〉の像として構築しようとした和田傳の仕事に注目する。

終章では、〈農民に由来し、農民が書き手であり、作品により農民が福利を享受する〉農民文学の要件が、昭和 36 年の農業基本法の公布、農業人口の激減によって成立が困難となった時代の問題を取り上げている。農民文学は現在、急速に廃れつつあるわけだが、望郷・地方・労働運動・植民地など関連諸分野について考えるための手がかりとしての意義、すなわち農民文学研究自体の意義は依然として失われていないとする。

## Ⅱ 審査結果の要旨

戦後、農民文学の成立要件が希薄となり、農民文学の創作は不振を極めているが、それと連動するようにして、農民文学研究もまた不振を極めている。そうした、いわば過疎地帯的状况を呈している農民文学研究の世界にあって、本論文の意義は、数十年ぶりの農民文学研究の出現という点だけにあるのではない。従来、農民文学研究と言え、関連の評論を整理し、それらに依拠した文学史的記述をもっぱらとし、他方、作品の解釈は質量ともに解説の域を出ないものが大半であった。本論文においてはそうした農民文学研究の通弊の多くが克服されているが、その理由は、何よりもこの数十年間の近代文学研究の進展の成果が遺憾なく生かされているからにほかならない。

本論文においてその成果が発揮された部分を具体的に挙げてみると、まずは、無数の農民文学評論を博搜し、これまでとは比較にならないほどの精緻な評論史を構築した点が挙げられる。第三章「和田傳の出発期を読む―大正末から昭和初めの農民文学論を視座として―」中の農民文学論史などがその代表的なものであり、それを可能にしたのは、データ類の整備・実用化や資料類の復刻の盛況などだが、それだけに依存することなく実際に初出誌紙にあたり、という厳密な研究態度はここ数十年間の近代文学研究の進展の賜物である。

ついでは精緻な作品論の実践である。「感想」や「解説」の域を脱して客観性をも獲得し始めたここ数十年間の作品研究の成果が本論文中の作品論には存分に生かされている。「面白い農民文学」との評価を打ち出した第六章・山田多賀市作「耕土」論、従来、ほとんど言及されることのなかった第七章・伊藤永之介作「電源工事場」に対するトータルな作品分析、第八章では和田傳文学のなかでも注目されることの少なかった「風の道」を取り上げ、＜自己表現する女＞とのテーマを見出している。

それらの作品論を支えているのが、これまたここ数十年間の近代文学研究の進展によってもたらされた文化研究の厚みである。「電源工事場」論における戦後の電源開発と干拓農政との重層、第四章・黒島伝治作「銅貨二銭」、「豚群」論における貨幣をめぐる考証、洋装や靴の考証などにそれが生かされている。第五章「国策文学論序説」中の和田傳「大日向村」をめぐる戦中の農政と満州移民をめぐる考察も貴重である。こうした近年の文化研究の手法の導入によって、これまで見過ごされてきた作品の細部に新たな光が当てられ、それが作品の解釈そのものをも刷新しているのである。

以上見てきたように、数十年ぶりの農民文学研究と言ってもよい本論文は最新の近代文学研究の成果にのっとり、質量ともに従来のそれらを凌駕した点を高く評価でき、今後の農民文学研究の指針ともなりうる論とみなすことができる。